

退職して5年

あれからもう5年になる。2014年3月31日、名古屋市立大を定年退職した。大阪市立大の大学院オーバードクターから、名古屋市立女子短大に就職して、35年にわたる「教員生活」に別れを告げた。いつものように学部棟6階の研究室ベランダから外を見ると、桜が美しかった。



2月22日2時から人文社会学部棟201教室で「最終講義」、卒業式などと、時のながれは早かった。その間に、研究室の片づけに追われ、退職の数日前になんとか終わることができた。そんな慌ただしい5年前の2月から3月を時たま思い起こす。



この5年の間に多くの人と別れ、多くの人と出会った。なんと言っても退職3ヶ月後に同僚の石川洋明さん、まだ若い仲間や旧友たち、そしてお世話になった先生らと長い別れとなった。



悲しい別れ的一方で、多くの人との出会いがあった。とりわけ2017年12月に名古屋から大阪に転居したので、交流の輪がいちだんと広がった。

この5年間を振り返ると、いろいろな思い出が浮かんでくる。石川さんが亡くなって1ヶ月後から、毎朝レポートを書き続けている。新聞などを読んだコメントが多いが、3月末や年末には、よく過去を振り返る。退職してから、時の移り変わりがあいまいになってしまい、レポートを書いて自分なりに区切りをつけてきた。

さて退職して5年の今日、どうやって区切りをつけようか。

昨年9月に「古希」なるものを迎え、年賀状にも体を「こき」つかわずなどと書いた。新聞などで同年代の訃報を読むと、つい先のことを考えてしまう。退職後の名古屋では家族のことなど不安で、先が見通せず、なんだか落ち着かなかった。でも大阪に移ってから、なんだか積極的になり若返ってきた気がする。交流の場も広がり、これまでより前向きに、大局的に考えられるようになってきた。

姜尚中さんが「語る一人生の贈りもの」最終回(朝日新聞3月29日朝刊)のさいごに、こんなことを語っていた。「大切なのは時代や世代という『設えもの』から離れ、自分なりの価値観で生きること。そうすることで他者のために何かをしよう、という働きかけが自然にできるようになると思います。古希が近くなり、ようやく気がつきました。年齢を重ねることでしか腑に落ちないことがある、ということに。」

元気に年齢を重ねながら、自分なりの価値観で前向きに生きていきたいものだ。

(2019年3月31日)